

愛知県栄養塩管理検討会議（第2回）会議録

1 日時

令和5年6月26日（月）午後1時30分から午後3時10分まで

2 場所

愛知県三の丸庁舎 8階 801会議室

3 出席者

（1）委員（17名）

【対面出席】

中田座長、鈴木委員、井上委員、岡辺委員、黒田委員、大橋委員、柴田委員、
岡田委員、藤村委員、村田委員、杉山委員、奥川委員、速水特別委員、
亀井特別委員、鈴木特別委員

（以上15名）

【欠席】

山田委員、大原特別委員

（以上2名）

（2）事務局（14名）

【対面出席】

（愛知県環境局水大気環境課）礮貝担当課長、中原課長補佐、小島主査、
城森主任

（愛知県農業水産局水産課）加藤担当課長、堀木課長補佐、松村課長補佐、
宮川主任

（愛知県水産試験場）石田漁場環境研究部長、曾根主任研究員、柘植主任研究員

（愛知県建設局下水道課）寺島担当課長、橋田課長補佐、武山課長補佐

（以上14名）

4 傍聴人等

傍聴人 2名

報道関係者 なし

5 新委員紹介

委員の交代並びに新たな特別委員（亀井特別委員）の追加について、事務局から

紹介した。

6 議題

- ・会議録の署名について、中田座長が鈴木委員と岡辺委員を指名した。

(1) 2017年度から実施したリン増加試験運転について

(2) 2022年度水質の保全と「豊かな海」の両立に向けた社会実験の実施結果について

資料1及び資料2について、事務局から一括して説明があった。

<質疑応答>

【中田座長】

実際に漁業を行っている黒田委員から、何か意見はあるか。

【黒田委員】

アサリについて、先ほど2017年から実施された管理運転の説明があったが、その1年前には西三河でアサリがいなくなった。2017年度から管理運転をしてもらい、当初はあまり効果が出ないと思っていたが、3年ぐらい前に9月から管理運転をやってもらってから、アサリが少しずつ年を越えて生き延びるようになって、去年はまたそれよりアサリの生存率が良くなってきた。まだ昔のことを思うと少ないが、腰マンガ協会の人たちもアサリ漁に戻ってきている。いろいろ説明を聞いたが、アサリの生存率は干潟よりも水深が深い所の方が高く、水深が深いところは3年ぐらい前からアサリが生き残っているのだから、管理運転を続けてもらえれば、海も少しずつ回復してくる気がする。豊川の方で稚貝が確認できていないので心配しているが、西三河の海に関しては、栄養塩の管理運転や社会実験をしてもらって、本当にアサリの生存率が良くなってきたと思う。ノリに関しては10回汐までいい状態が続き、社会実験の効果があると思う。この社会実験をもう少し続けてもらえれば、本当に結果につながってくると思う。

【鈴木委員】

資料2の各浄化センターの運転状況について、放流水の濃度の振れ幅が非常に大きいのが、振れ幅をなるべく排除し高い値で維持することは、技術的にできないのか。

【藤村委員】

上限値を変えた1年目で経験がなかったため、少し致し方ない部分もある。過去5年間のリンだけの試験運転を見ると、5年続けてきてノウハウはできた。現場を担当している職員は上限値ぎりぎりを狙って栄養塩を出してあげたいという気持ちで常日頃やっていることは理解してほしい。以前は薬品を入れる量をマニュアル化してきたが、今年は初めてでそういったマニュアルも何もなかったため、そういった変動がどうしてもある。今年は基準値が上がったので、薬品を投入するのは止めようかというところから始めたが、薬品を止めると急に濃度が上がり、薬品を入れると今度はその薬品がまた回って、なかなか濃度が上がらないという状況のため、乱高下した。今年度だけで20~30回、夜中とかに電話がかかってきて、「薬品をどうしましょう。」といった相談もあった。逆に窒素は乱高下しないし、余裕があると思われるが、これは薬品で落とすようなことができなくて、微生物の働きで濃度を落とすため、空気量を変えたり、試行錯誤で行った。特に今年は9月から管理運転をやるということで、9月はまた微生物の働きとかも違うので、日間平均の値で管理するのはすごいプレッシャーで苦勞するという声を現場から聞いている。マニュアル化とか基準の関係でそういう厳しい管理がもう少し緩くなると楽になると思う。

【黒田委員】

浄化センターの人たちは本当に大変だと思う。1か月単位で管理できればと思う。

【鈴木委員】

凝集沈殿材はPACか。

【藤村委員】

そのとおりである。

【鈴木委員】

矢作川と豊川どちらもPACか。

【藤村委員】

そのとおりである。ただ注入の仕方が、矢作川浄化センターでは中央管理システムで量を設定している。豊川浄化センターは手で操作していたが、職員が大変だということで、少し改良して楽になった。

【黒田委員】

毎月、矢作川浄化センターと豊川浄化センターのデータをもらっているが、

大腸菌数が違う。これは施設の性能の違いか。

【藤村委員】

矢作川浄化センターはノリ漁場が近いため、紫外線滅菌を行っている。その他の処理場では、塩素を入れて大腸菌数を落とすため、それで大腸菌数が違うと考えている。

【井上委員】

ノリについては、4月中旬まで出荷ができたということで、矢作川浄化センターからの放流効果ではないかという説明であった。実際の調査は浄化センターの近傍だけで調査しているが、範囲を広げて調査をすれば、より明確になるかなと思った。

【事務局】

2021年まではもう少し遠くの調査地点もあったが、その海域では2022年度に養殖をやめてしまったため、結局、近場の調査地点ということで、2022年度はこのような調査地点になっている。効果の広がり範囲を確認するために、もう少し遠くの地点も考えたが、西尾味沢地区よりも東の方になると大分離れており、矢作川浄化センターから一番遠くの地点まで調査地点を設けようとすると、途中で排水路とか、この辺りで養鰻をやっているのだから、その排水も流れ込んだりして、かなりそちらの影響が出てしまうようなことが多い。このため、従来から調査している地点で継続したデータを取って、調査で把握しきれないところは次回の検討会議の時にシミュレーションを示したいと思うが、その辺りの効果は計算結果を見て評価したいと考えている。

【井上委員】

分かりました。もう1点だけ資料2の3ページの図10（矢作川地区のTN、TPの分布図）で、この中で多分、一色が含まれると思う。衣崎もこの中に含まれるのか。味沢の方はもう少し北の方ではないかなと思った。

【事務局】

図10の一番右側の切れるぐらいが味沢の東の端ぐらいである。だから一色や衣崎は、この地図には入りきらないような位置関係になる。

【井上委員】

味沢とか西尾の方は、味沢の方が近いから、全リンとか全窒素の濃度が高くなっているというのは、その辺りになるのか。図10であるが、一色とかは、もっと南なのか。

【事務局】

はい。南東である。

【井上委員】

このコンター図をこの辺りまで、一色とかまで描くのはやはり難しいのか。

【事務局】

そうである。先ほど説明したように、他にも影響が出てしまうため、かなり難しいと思う。

【鈴木委員】

私が思うのは、放水口から出たものが、溶存物質として拡散していくイメージと、あともう一つは一色干潟がずっと広がっているの、結局そこの生物代謝による摂取と排出のバランスというのがあって、例えば干潟だけで調べると潮位によっても違うが、非常に溶存態が多くて、懸濁態が少ないということで、トータルとしては、ほとんど変わらない。つまりそれだけ物質循環が早い場所がこの近傍海域に続いているので、単純な濃度のコンター図では、その辺までは分からないのではないかなということはある。だから放流口近傍については、代謝よりも、拡散が効いてくるので、綺麗なコンター図が描けると思うのだが、それから離れていくと、生物代謝の速度にもよるけれども、なかなか綺麗なコンター図は今までの経験では描けない。ただできるだけ広範囲に測点を持って、これは水産試験場の方に酷であるが、できれば拡大というか、観測点があった方がよい。それも観測のタイムスパンはなるべく短い方が望ましい。なかなかハードルが高いとは思いますが、その辺は将来的には例えば生態系のシミュレーションモデルを使って、ある程度面的に推測するというのではないかなと私は思う。

【井上委員】

はい。私もそれに同意というか、スナップショットで見ているので、なかなかその間をつなぐのがどういうストーリーでこういう結果になっているかを見るのはなかなか難しい。できればシミュレーションのようなもので、うまくこっちから放流されたものがどこにどのように到達して、それによってアサリやノリの養殖等にどのように効いているのかというものが出てくると、説得力があって、良いのではないかと思った。あともう一点、私も覚えていないのだが、豊川とか河川から入ってくる水質で、それはこの水質と比べて栄養塩等は高いのか、低いのか。最後の6ページで、今年は河川流量が少なかったから、

拡散しなかったということであるが、逆にそちらが低ければ河川流量が多くなると濃度が希釈されて低下するという影響もあって、どちらの方がいい影響になるかが、その濃度比とかいろんなことで変わると思う。今すぐには分からなければ後でも良いので、そういうことも少し考えて考察してもらえればと思う。

【事務局】

季節変化などもあると思われ、冬季は河川の流量が低下しているのはご存じかと思うが、それ以外にやはり1月、2月に塩分の低い領域が狭くなって、同じようにTN、TPの高濃度の範囲が狭まっていくという解析結果もあるので、連動していると解釈している。流量が少ないところ、塩分低下域が狭いときに、拡散範囲が狭まる傾向があると思う。

【鈴木委員】

今の話にも関連して、資料2の7ページの参考文献について、私も少し論文の作成に関わったので。参考文献の一番最後に水環境学会誌に載せた蒲原ら2022にあるが、これは、今、井上委員が述べたように川の影響と、それから下水道の影響を分離するのに少し苦労した記憶があるが、これは観測点の塩分濃度から河川水の寄与、それから、放流水の寄与を明確ではないが大雑把に分離して、下水道の効果がどのくらい効いているのかをある程度定量化した関連文献である。だから、河川水量だけで考察するのはやはり少し飛躍があって、多分現場の観測点の、その時の観測値の塩分濃度から河川水の影響がどのくらいなのか、どう影響するというような少し単純な計算をしてみないと、なかなかこれだけで、こうなったとはやはり言い切れないのではないかなと思う。ちなみにこの豊川の流域下水道の栄養塩効果の結果は、特に冬季については、下水道の栄養塩供給効果は河川に匹敵するという結果だったと思うし、それに応じてアサリ稚貝の発生の状況も生育の状況も非常に大きく影響を受けるという結果だったと思う。

【岡辺委員】

井上委員のモニタリングの話に少し関連するが、クロロフィルaとかの広域なモニタリングだったら、衛星画像等を利用する手があると思うが、そういった検討はされてきたか。リモートセンシングによるものだから、窒素・リンはなかなか把握できないが、クロロフィルaは広域に把握しやすい。

【中田座長】

最初からだから結構難しい。藻場があったりすると、水中のクロロフィル濃

度との区別がなかなか難しい。濁度との絡みもある。だが、できないことはないと思うけれども。

【岡辺委員】

沖側のモニタリングポイントが A-10 と、K-7 の 2 ヶ所あり、沖側の水質環境データを衛星データの分析に使えるのではないかと思う。あと、衛星には過去のデータがあるので、過去から現在までの水質変化が衛星データから分析できれば、補足情報として有効かと思う。これまでに何か検討されているのであれば申し訳ないが、衛星データも活用方法があるのではないかなと思う。

【岡田委員】

水産試験場ではしきさいだったか、衛星データではクロロフィル a の画像等は、例えば、浮き魚の餌の観点から、船びきの資源の関係で見ている。しきさいのデータ等は、月 2 回ほどしかこのエリアのデータがうまく取得できないのと、先ほど岡辺委員が述べたように、細かいエリアでそういう比較をするのが、精度としてはかなりまだ低いというようなことだった。参考としては十分把握できるし、見ることができるかは検討できると思う。

【岡辺委員】

お金をかければ今は解像度が高い衛星データがあり、ノリの様子とかも恐らく分かるぐらいの解像度があると思う。コストパフォーマンスをどう勘案するかであるが、もう少し面的に詳細に把握したいのであれば有効かと思う。

【大橋委員】

アサリの現存量や肥満度という言葉がある。この資料には、現存量とはアサリの殻付きの重量と記載されている。稚貝を撒いたりすると思うが、撒く量との関係はどうか。もともとこれは撒いた後の結果なのか、急激にアサリが増えたりしているのか、その辺がどのような数字になっているのか。

【事務局】

矢作川地区の調査では、8月の終わりぐらい、9月から増加運転が始まる前に毎年、アサリの稚貝を撒いている。だから、その時点で現存量が1回ドカンと上がる。

【大橋委員】

やはり稚貝を撒いて、現存量が上がると。稚貝を撒く量は、毎年変わったりするのか。

【事務局】

ほぼ毎年、1ヶ所に1平方メートル当たり2,000個ほどである。

【大橋委員】

稚貝を撒いたエリアも、矢作川地区の毎年同じ場所にほぼ定量的に撒いていることを毎年繰り返していると。それで、毎年撒いていて最近の方が良くなってきたという理解か。

【中田座長】

栄養がないと、冬を越せないね。

【大橋委員】

確かに現存量が逆に多すぎると成長しないとか、その辺の話も少し書いてあったので。

【黒田委員】

今、言われたとおりアサリ種苗を毎年、一生懸命撒いている。今までの場合だと大体、1月ぐらいまではかなり生きている。2月を越えればいいのだが、それがずっと越えられなくて、ようやくここへきて、2月を越えて、3月の潮干狩りシーズンになって、前の年のアサリが生き延びる。ここ3年ぐらい前から変わってきた。

【大橋委員】

はい。ありがとうございました。

【岡辺委員】

それに関連して、コホート分析のようなものは実施しているのか。1年目、2年目、3年目のアサリがどれぐらいの割合で生き残っているのか、サイズが分かれば分析が可能だと思うが。

【中田座長】

多分やっているよね。

【岡辺委員】

そういう情報があると黒田委員の発言が補足できるかなと思う。

【中田委員】

多分そのデータが出てくるよね。

【岡辺委員】

はい。分かりました。

【速水特別委員】

矢作川地区のノリやアサリといったときに対象となる漁場は、衣崎まで全部含めてグラフ化されているということか。

【事務局】

このグラフは調査地点が、西尾味沢地区までとなっている。

【速水特別委員】

ノリとかアサリの肥満度のデータとかそういうものも全部か。

【事務局】

西尾味沢地区で行っているものである。

【速水特別委員】

管理運転の効果が出ていると現場でも感じているし、データとしても定性的にも出ているのかなというような気はするが、資料として示されたデータが窒素・リンとか、クロロフィルaみたいな物質に結構限られている。例えば水温等、その他のデータも通常であれば一緒に分析しながら、水質の状況を評価しているが、その辺りが無い。そこはシミュレーションの中には入れるのか。何のデータを用いてシミュレーションするのかを確認した方がいいと思う。水質をシミュレーションした結果が次回提出されるというような認識で良いのかということと、そこにいろんなパラメーターとかも入ってくるような分析をしているということか確認したい。

【事務局】

植物プランクトンの増加も含めたシミュレーションになる。

【速水特別委員】

パラメーターとしては窒素、リンのほか、水温や塩分等も含めるのか。

【事務局】

調査でも観測しているし、その辺のデータや自動観測ブイのデータを入れて、シミュレーションを用いて計算する。

【速水特別委員】

現地データがすごく限られていると思うので、多分そのシミュレーションで効果を検証するというのが一番やりやすい方法ではないかなと思う。ここが結構重要なキーになるのかなと思う。でもどういったデータを使ったのかも含めて、この検討会議で見せていくのが結構重要ではないかと思う。よろしく願いしたい。

【中田座長】

データはかなり取っているが、示されていないだけで、プランクトンや無機体栄養塩などかなりのデータを取っている。だんだん整理されてくるものと思っている。

【井上委員】

資料2の3ページの上の表3に調査項目が示されており、そのデータを全部取っているはずであるので、一覧表か何かでそのデータも示してもらえればいいと思う。

【事務局】

なかなか全てのデータとなると大変なので、抽出するとか、委員の方からこのデータは見たいとかいうのがあればそれをまとめてとか、全てを出すと多分膨大なものになってしまう。

【井上委員】

グラフまで作成すると仕事が大変だと思うが、表だと1回の調査で多分1枚ぐらいではないか。

【鈴木委員】

生態系全体を網羅するのは非常に観測としても大変であるけれど、今後、生態系モデルを使うときに、どういうところが出口なのかを念頭に置くべきと思う。例えばアサリの生残りとか、肥満度とかに、今の放流水の変化がどのぐらい効いてくるかという話については、水産試験場で今後どう解析するかはよく分からないが、湾のスケールでは、伊勢湾シミュレーターは、今、伊勢湾再生行動計画の中で、中部地方整備局が事務局で、データをずっと把握してきていて、ちょうど今、アサリの資源減少がそのモデルで再現できるか、それから資源を回復するためには、どのぐらいの水準の負荷が必要なのかという感度解析みたいなものを、中田先生が座長で今やっているが、その中でもアサリの成長モデルを解くためには、水温であるとか、栄養塩各種であるとか、植物プランクトン量であるとか、あとアサリも肥満度とか成長速度とか、それら全部のデータを入れた上での再現性を検証した上で、感度解析していく手続きになっていると思う。だから今回の結果も多分そのようなアサリ成長モデルで評価することになるのではないかと、水質のレベルを変えることによって、どのぐらいアサリ個体群に効いてくるのかは、モデルで最終的な評価をするのかどうか、私はよく分からないが、方向としてはそういう状況になるのではないかと。

【事務局】

そうである。

【鈴木委員】

逆に言うと再現性検証のための基礎データとしての位置付けというのはやはりあって、非常に膨大なものが多分あると思う。他の機関で取れたデータや時系列で取っている県の自動観測ブイのデータも多分その中に入ってくるのではないかと思う。そういう結果を見ながら、個別の要素がどのぐらい効いているのか、例えば水温がどの程度効いているのかとか、そういう判断はできるのではないかと思う。ただ、今回のデータを見せてもらっている限りでは、やはり栄養塩の放流水質の水準によって、漁業生物がそういう応答をしているものと見ることができると思う。

【速水特別委員】

この検討会議で、どこまで、その効果であるかといったところまで検証するのかにもよるが、定性的な部分は、この資料とかでも何となく読み取れるかなと思っている。ただ、その先に、定量的な効果としてあるかないかというところは、この資料では少し分かりにくいので、確認させてもらった上で、どこまでこのシミュレーションで頑張れるかといったところは、我々関係者としても非常に重要なデータであると思う。また勉強させてもらえればと思う。

【亀井特別委員】

そうすると、今度の検討会議で出てくるそのシミュレーションというのは、アサリに必要な栄養塩濃度だけではなく、例えば必要な水温など、他のパラメーターについても、複合的に必要なデータのセットのような感じで出されるイメージでよいか。

【鈴木委員】

基本的には生態系モデルというものは、その場の水温や塩分などの物理的な要素については再現性を検証して、それをベースに生態系を載せて計算するという手続きになる。今も例えばその水温が生物の生産、成長に当然効いてくるわけで、これは植物プランクトンにもアサリにもそのようであるし、水温に対する応答は生物ごとにセッティングされていて、それを同時に動かしていくようになっている。

【亀井特別委員】

例えば、ある水温に対してはこの栄養塩濃度が必要であるというアウトプッ

トが出てくるわけではなくて、もっと全体的に求められるものが出てくるイメージなのか。

【鈴木委員】

実際今までも伊勢湾等で、ちょうどアサリが非常に激減した時期に、なぜ資源が急激に低下したのかとの解析、ここでも文献一覧に多分載っていると思うが、その時には、そのアサリの個体成長モデルというものを使って、それは要素としては水温がどのくらい効くのか。植物プランクトンはどのくらい効くのか。その相乗効果を見るというモデルである。だから栄養塩だけで見るとか、水温だけで見るという個別の要素に対応したモデルではない。そこは今の内湾の、特に生態系モデル、アサリの個体動態モデルについては十分に考慮されている。

【亀井特別委員】

分かりました。

【村田委員】

矢作川浄化センターと豊川浄化センターの管理運転の窒素・リンの濃度はほぼ一緒であると思うが、放流している水域の環境が違うと思う。もともと豊川浄化センターから放流している水域は、窒素・リンの濃度が高い状況であることから、場所に応じて、放流する濃度の設定を変える必要があるのではないかと思うがどうか。矢作川浄化センターと豊川浄化センターで濃度を合わせる理由が何かあるのか。その点を伺いたい。

【事務局】

逆に言うと、どの濃度で流したらいいのか分からないので、一緒の濃度としている。

【村田委員】

豊川水域だと、貧酸素や苦潮の影響を受けやすいような環境になっていると思うが、これから解明していくのか。

【事務局】

単純にその窒素やリンを管理運転で出したからといって、それが単純に赤潮や苦潮に結び付いていないというか、明らかに増えたということではなく、また別の要因があるのではないかと考えている。

【村田委員】

分かりました。

【柴田委員】

今の質問について、まず基本的なこととしては国が流していいという濃度と量の規制値がある。漁業者からは窒素とリンの濃度を国の規制値の上限まで上げて放流してほしいという要望があり、まずは県が管理しやすい2ヶ所の浄化センターで取り組んでみようということで、国の規制値の上限まで緩和して放流したものである。だから矢作川だからここまでとか、豊川だからここまでとかいうわけではなく、まずは上げてみて環境に悪影響が出ないかをまず確認しようと考えた。今回の結果だけを見ると、豊川地区においてはアサリに効果があったかどうかというのは少し不明瞭なところがあったが、まずは非常に困ったような赤潮が出たわけではなく、窒素とリンについても影響はなかったことで、とりあえず環境に悪影響が出なかったことは、社会実験で確認できたかなということである。今後シミュレーションしながら、どれぐらいの濃度が必要なのかを見ていく必要があるというところである。

【村田委員】

はい、分かりました。

【速水特別委員】

関連して、底層DOとかへの影響はそこまでなかったような感じか。

【柴田委員】

この年は、貧酸素が比較的小さい年だった。前回1月の勉強会のときに蒲原元委員から話があったが、この40年間で窒素とリンはすごく減っている。しかし、伊勢・三河湾の貧酸素水塊の面積は、決して減ってはいなくて、かえって増えていくという状況がある。窒素・リンを増やしたから貧酸素水塊が増えるというメカニズムにはなっていないのかなと考えている。

【速水特別委員】

全体的にはそういう傾向があるかなと思うが、局所的な視点では一応確認をしておいていただきたいと思う。

【柴田委員】

先ほど黒田委員や藤村委員が述べた施設管理を日単位ではなく週単位でできないかという提案については、今後の運用に繋がると思う。基本的にそれを変えられるというか、その可能性はあるか。

【速水特別委員】

これは制度上日単位になっているので、それを変わるとなると、もちろん伊

勢湾だけではない話になってしまうので、それなりの全体的な議論が必要になってくる。

【柴田委員】

規則の改正が必要ということか。

【速水特別委員】

細かいところは確認するが、法律上というよりはその下の省令等の部分だと思う。

【中田座長】

今は日単位か。

【速水特別委員】

はい。

【中田座長】

日平均か。

【速水特別委員】

はい。

【鈴木委員】

今、話した基本的な社会実験の位置付けとして、水産資源の急激な減少を食い止めるために、放流水中の窒素とリンの濃度を国の規制値の限度ぎりぎりまで上げていこうということだと思う。今の濃度が日平均で越えないかとの話になると、私も実際現場で話を少し聞いたときに、例えばこのデータでも、正月に急に上がったりしているが、もう担当者の方々が本当に少しでも超えたらもう大変だとピリピリしているとのことである。今は全部委託で運営をしているということで、委託された技術者の方々が大変ピリピリしているのを本当に肌で感じたのである。これは要望になるかもしれないけど、社会実験という形で先ほどのような目的で実施しているので、その評価についても日単位ではなく、例えばもう少しスパンを広くしてやはり期間平均とかそういうもので、今回の社会実験については放流水中の濃度を評価していくというわけにはいかないか。

【速水特別委員】

我々も実は市の浄化センターを訪問して、非常に苦労されていると聞かせていただいております、重々状況は承知しているが、この社会実験だけを例外的に取り扱うことは法制度上なかなか難しい。

【鈴木委員】

ただ、現場も本当に厳しい。そういうことだと長続きしないと思う。今は社会実験だけど、将来的にこれをどうするのかという話は今後検討することになると思う。削減計画全体の見直しという話もまだ残っている。漁業者の方々は当然この社会実験を継続してほしいと多分思っている。そうするとやはりどうしても現場の技術者に負担が掛かってしまって、それでうまくシステム全体が動かないと。こんな厳しい状況ではとてもじゃないけどやれないという声が現場から出てくるのがね。やはり私は、これは何とか配慮していかなければいけないし、暫定的であれ、そういう目的に沿った基準の見方を少し検討していただきたいなと私はそう思う。

【速水特別委員】

色々な考え方があると思っている。例えば週平均とか、或いは制限自体を少し上げて、その間の中でうまく利用するかとか、いろんな方法があると思うので、そこで現場の方々の意見を聞きながら、何ができるかを考えていくことかなと思う。

【鈴木委員】

よろしくお願ひしたい。

(3) 2023 年度の社会実験の実施及び今後の検討スケジュールについて

資料3について、事務局から説明があった。

<質疑応答>

【黒田委員】

我々愛知県漁連といたしましても、先ほど三河湾の結果が説明されたが、伊勢湾の常滑・鬼崎・小鈴谷・野間等のアサリが、以前の一色干潟と全く一緒の状況になっている。それで、伊勢湾の方にも、やはり目を向けてもらって、伊勢・三河湾双方が再生できるようにやってほしい。それと今委員の方にいろいろ意見をいただいて大変参考になる。我々としては、データとかがいくらあっても、実際にアサリやノリが獲れなければ、やはり駄目である。我々漁業者と意見交換もしてもらって、今もずっとそういう状態であることを知ってもらって、漁業者の方もかなり今、神経を使ってやっているの、その辺をタイアップして、今後やってもらえたらいいと思う。

【亀井特別委員】

確認と質問で、今回主に矢作川と豊川の浄化センターでの社会実験が中心的な議題として扱われているが、伊勢湾の方でも実施しているリンの増加運転について、この会議では次回以降取り扱うのか。

【中田座長】

今のところは扱ってない。

【事務局】

今は扱ってない。この会議では取り扱っていないが、関係の市には別途その結果報告を考えている。

【柴田委員】

この会議の設置要領としては、今回の社会実験の効果検証に関することを踏まえて、伊勢・三河湾の栄養塩管理のあり方に関することを検討することとしている。この案件全てに繋がっていくことで、決して伊勢湾の話をするのを否定しているものではない。まずは今回の三河湾についてシミュレーション結果を示して、それからどうやって伊勢・三河湾の栄養塩管理のあり方を考えていこうかということになると思う。

【中田座長】

先ほどからシミュレーションの話が出ているが、いつ頃取り掛かることになる予定か。

【事務局】

既に発注して契約しており、業務を実施してもらっているところである。

【中田座長】

来年の2月の会議では、一応その結果の概要は分かるということか。

【事務局】

そのように考えている。

7 その他

特になし